

中国四川省の石刻をたずねて

―二〇一四年度、二〇一六年度の調査から―

名古屋市立大学大学院人間文化研究科 吉田 一彦

四川省の石刻の調査

日本の宗教には仏教と神信仰の融合が見られるが、これをアジアに広く見られる宗教の融合の様相と比較し、日本の神仏の融合をアジアの宗教の歴史と文化の中に位置づけたい。

私たちは、こうした観点から、現在、日本学術振興会科学研究費の補助を受けた共同研究「日本における仏教と神信仰の融合に関する総合的研究―アジアとの比較の視座から―」(基盤研究(B)、研究代表者吉田一彦、平成二六〜二八年度)に取り組んでいる。

二〇一四年度、二〇一六年度は、共同研究チームによって中国四川省の大足県、安岳県の石刻群を調査し、唐から宋への仏教史の展開の特質、仏教と神信仰の融合の諸相、信仰の特色などについて多くの知見を得、日本の宗教史との比較検討を行った。ここでは、今回の二回の調査の概要を覚書として記述しておく。

たい。詳しい研究報告はいずれ調査参加者からなされるであろう。調査は二〇一五年三月一七日〜二二日と、二〇一六年九月一〇日〜一六日に実施した。対象地は次の通りである。

二〇一五年三月

一七日 成都に集合、何劍平教授と学術交流。

一八日 大足県に移動、北山摩崖造像。

一九日 宝頂山摩崖造像、大足宝頂香会、南山摩崖造像。

二〇日 石篆山摩崖造像、妙高山摩崖造像、尖山子摩崖造像。

二一日 石門山摩崖造像、北山後山大仏。成都に移動、何劍平教授と学術交流。

二二日 四川省博物院、成都より帰国。

二〇一六年九月

一〇日 成都に集合、四川省博物院。

一日 安岳県に移動、臥仏院摩崖造像。

造像。

一二日 高升大仏、毘廬洞摩崖造像、孔雀洞摩崖造像、茗山寺摩崖造像、名称不明石刻、華嚴洞石窟。

一三日 黄桷大仏、圓覚洞摩崖造像。

一四日 千仏寨摩崖造像。

一五日 圓覚洞摩崖造像(再調査)。

仁寿県に移動、牛角寨摩崖造像。

一六日 成都より帰国。

二〇一四年度は、吉田一彦、荒見泰史、上島亨、佐藤文子、高志緑、高橋早紀子が大足石刻群の調査を行ない、また荒見泰史氏の紹介により四川大学の何劍平教授と学術交流し、種々のご教示にあずかった。心より御礼申し上げる次第である。二〇一六年度は、吉田一彦、上島亨、曾根正人、関山麻衣子、高井龍、高志緑、王珏人が安岳石刻群の調査を行ない、その後成都への移動の途中に仁寿県の牛角寨摩崖造像の予備的調査を実施した。

大足石刻群と安岳石刻群

大足石刻群は中国四川省重慶市の大足県にある。この地には七五もの石刻があり、唐にはじまり、五代、宋、さらに後代に至る多数の磨崖造像が

現存している。その数は総計約五万
体ともいわれている。それらには題
記が少なからず残されており、そこ
から成立年代、発願者、作成目的、
祈願内容などを知ることができ
る。中に、北宋・南宋期に作られたもの
が数多くあり、この時代の信仰を具
体的に知ることができるのが貴重で
ある。それらの多くは仏教の像であ
るが、道教・民間信仰の像や儒教の
像も見られ、宗教の融合を考究する
上でも重要な石刻群になっている。

安岳石刻群は四川省資陽市安岳県
にあり、大足県にもほど近い。この
地にも一〇五もの石刻があり、総計
約一万体といわれる造像が現存して
いる。こちらは南北朝期にはじまり、
隋唐から五代を経て宋、さらに後代
に至っており、やはり五代・北宋・
南宋期のものが多い。こちらも題記
を持つものが少なくなく、そこから
信仰の特質を知ることができるのが
貴重である。

近年、大足石刻についても⁽¹⁾、安
岳石刻についても⁽²⁾、中国における
研究が急速に進展しており、日本に
おける研究も蓄積がある⁽³⁾。大足県、
安岳県には数多くの磨崖造像が存在
する。今回は著名なものを中心に、
宗教の融合という観点から重要と考
えられるものを優先的に調査した。

仏道二教、仏道儒三教の融合

大足県三驅鎮仏恵村の石篆山摩崖
造像は奥の方から第一〜第九号と龕
の番号が振られており、入口から進
んで行くと、第九号の地藏龕から見
学することになる。ここには地藏菩
薩と十王の像がまつられており、向
かって右よりに「紹聖三年丙子」
(一一〇九六)の年紀をもつ題記が
はつきりと目視、判読できる。次の
第八号は老子龕で、老子と十四人の
真人の像がまつられている。第七号
は仏教の三身仏龕で、毘盧遮那仏を
中尊に、蓮台に乗る三如来の坐像と
菩薩、比丘、護法善神などの諸像が
まつられている。第六号は孔子龕で、
孔子と十哲の像がまつられている。
三身仏龕は元豊五年(一一〇八二)、
老子龕は同六年(一一〇八三)、孔子
龕は元祐三年(一一〇八八)のもので
あるという⁽⁴⁾。このように石篆山摩
崖造像には、仏教を中心にしつつ、
仏道儒三教の融合した信仰が見られ
る。

大足県李家鎮曙光村の妙高山摩崖
造像は、正面の崖上方に第二〜第五
号の四龕がある。他に向かって左に
小さい龕が四つあり、右手の高い位
置には阿弥陀如来立像がある。第二
〜第五号は、崖の高いところにあっ
たので、私たちは梯子を借りて登っ



妙高山摩崖造像・仏儒道三教合龕



妙高山摩崖造像

て見学した。第2号は仏道儒三教合龕で、正壁に釈迦三尊像、向かって右壁に老子三尊像、左壁に孔子三尊像があり、仏道儒三教の如来・聖人をまつるものになっている。釈迦如来像は蓮台の上に結跏趺坐している。脇侍の立像は頭部を失っている。第3号は華嚴三聖・十六羅漢龕、第4号は西方三聖・十観音龕、第五号は水月観音龕である。現地では目視することができなかったが、水月観音龕には「紹興乙亥仲春五月」(一一五五)の年紀を持つ題記があるとい⁽⁵⁾、胡文和氏によると、これらは全体として南宋の紹興年間(一一三一～一一六二)のものであるとい⁽⁶⁾。

大足県石馬鎮新勝村の石門山崖造像には、多数の龕、造像があり、複雑な構成になっているが、孔雀明王像や十観音像など仏教の造像が中心を占め、道教や民間信仰の像があわせまつられている。現地の楊旭全老師のお話によると、石匠像と水月観音像は紹聖元年(一一〇九四)、山王土地の像が同二年、五仏龕が同三年のものだという。また、この三皇洞は、一九六〇年代に崩落し、一九八〇年代に現状になったもので、かつては牛頭、馬頭、山王、地母がまつられる部分と三皇洞の部分が一体であったという。三皇洞には、正



石門山摩崖造像



石門山摩崖造像・三皇洞

壁に道教の天皇、地皇、人皇の三体の像、左右の側壁に文官の立像などがまつられており、向かって右壁上部には二十八宿の小像がまつられていた。このように、石門山石刻には仏道二教、民間信仰の融合が見られる。

次に、安岳県石羊鎮の箱蓋山には華嚴洞石窟がある。ここには華嚴洞

と大般若洞の二つの大きな洞がある。華嚴洞には華嚴三聖像がまつられ、中尊は毘盧遮那仏の坐像、向かって左が獅子に乗る文殊菩薩像、右が象に乗る普賢菩薩像であった。中尊の頭部からは二つの筋が曲線的に放射されている。そして、文殊菩薩像の向かって左壁に僧人の像が、また普賢菩薩像の右壁には道教の真人の像(左手に箱を持つ)があり、さらに僧人や真人に連続するように左右に五体ずつ圓覚菩薩などの計十体の菩薩像があつて壯観である。上部には善財童子五十三参図の浮彫が刻まれている。これらの像は優品ぞいであり、参拝者に独自の宗教世界の顕現を感じさせるものになっていた。

一方の大般若洞には、釈迦如来像、阿弥陀如来像、薬師如来像、文殊菩薩像、普賢菩薩像とともに、孔子像、老子像、道教二十四天の像などがまつられており、私たちは仏道儒三教の融合的信仰に接することができた。

安岳県の雲居山の上にある圓覚洞摩崖造像には数多くの龕があり、私たちは調査期間内に二度訪れて多くの造像を調査し、題記を確認する作業を行なった。ここには唐・五代・北宋・南宋期の摩崖造像が多数あり、数多くの仏菩薩像などがまつられている。入り口近くの浄瓶観音窟(第七号)には、踏み割り蓮台上に立

ち、浄瓶を持つ観音菩薩立像があり、龕内の向かって左側に四体の供養人の像があった。供養人の背後の壁面にはそれぞれ長方形に作った札部があり、そこに「癸酉紹興二十三年九月二十二日工畢」（一一五三）などの文言を持つ題記があることを確認することができた。第九号は圓覚洞で、正面に三身仏（中尊が毘盧遮那仏、向かって左が釈迦牟尼仏、右が盧舎那仏）の坐像があり、その左右に十二圓覚菩薩像がずらりと列立している。第一〇号は釈迦牟尼窟で北宋時代の釈迦如来立像がまつられており、龕内に供養人の像がある。蓮華手観音窟（第一四号）には、踏み割り蓮台に立ち、蓮華を持つ観音菩薩立像がまつられている。

次に、南崖に進むと、上段下段の二段に龕が設定されている地区があり、上段に登っていくと、石亀の像があり、それに続けて千手観音窟（第二一号）、三聖仏窟（第二二号）、天尊窟（道仏合窟）（第二三号）がある。このうち三聖仏窟には、三つの茎蓮台に坐す三如来の像があり、左右の壁面に脇侍像がある。龕内の向かって右手壁面にある色紙型のような部分には題記が刻まれており、「大蜀天漢元年」（九一七）の文言を確認することができた。

次の天尊窟（道仏合窟）は天尊の

坐像を中尊に、その左右に四体の脇侍像があり、それらの頭部の間に迦楼羅、乾闥婆、夜叉などの護法神の像が描かれている。さらに向かって右壁には老子と四体の脇侍像が、左壁には仏と二弟子・二菩薩の五尊像がある。この窟も隣の窟とほぼ同時期の五代のものと思われ



圓覚洞摩崖造像・天尊窟（第71号）

さらに、圓覚洞摩崖造像全体の最奥部まで進むと、天尊窟（第七一号）があり、八角形の台座に趺坐する道教の天尊像と脇侍像がまつられている。この窟はこの地区全体の最初期のもの、「開元廿年」（七三二）のものだという。この窟の隣には観音窟（第七二号）があり、火災二重

光輪の光背を描く観音菩薩立像がまつられていた。このように、圓覚洞摩崖造像では、その最初期から神信仰（道教）と仏教との融合が見られる。

孔雀明王の造像

四川省では、また多くの孔雀明王像に出あうことができた。大足県では、宝頂山摩崖造像、北山摩崖造像、石門山摩崖造像に立派な孔雀明王像がまつられていた。

北山のもの、孔雀上の蓮台に孔雀明王が結跏趺坐する彫刻で、頭に宝冠を載せる四臂で金色の像である。窟内は千仏になっている。北宋の靖康元年（一一二六）のものだという。宝頂山のもの、孔雀上の蓮台に孔雀明王が結跏趺坐する彫刻で、頭に宝冠を載せる四臂で金色の像である。南宋の淳熙、淳祐年間（一一七四～一二五二）のものだという。

石門山の孔雀明王経变相窟のもの



石門山摩崖造像・孔雀明王像

は優美な像で、強く印象に残っている。これは、踏み割り蓮台にのる孔雀上の蓮台に孔雀明王が結跏趺坐する彫刻で、頭に宝冠を載せる四臂で彩色の像である。また窟壁には多くの彩色の小像が描かれている。南宋の紹興年間のものだという。

安岳県では孔雀山麓の孔雀洞摩崖造像に孔雀明王窟があり、孔雀明王像がまつられている。これは孔雀上の蓮台に孔雀明王が結跏趺坐する彫刻で、頭に宝冠を載せ、宝冠中に化仏の坐像を有する、四臂の像である。北宋時代のものだという⁽⁸⁾。この像の左右には天王像、右に六天人像、その右に四金剛像、左には神像などがまつられている。横にある階段を上っていくと、上に大雄宝殿、三清堂と石塔があり、大雄宝殿、三清堂は新しいものだが、石塔は北宋代のもので、「経目塔」という。これは単檐式、八角三層の塔で、各層に柱八根があり、柱は八面を持ち、そこに経名が刻まれている。経名は一四四部に及ぶという。

日本では、平安鎌倉時代に孔雀明王への信仰が高まりを見せたが、その特質は必ずしも明らかではなく、今後の研究課題になっている。私は、中国における事例と比較しながら考察を進めていく必要があると考えている。

柳本尊への信仰

四川省のこの地域では、柳本尊と呼ばれる僧の活動の跡が複数の摩崖造像に残されている。柳本尊は九世紀中後期から十世紀初期の唐末五代初に活動した僧で、四川地域に金剛界瑜伽部密教を広めた人物として知られている。その布教活動には捨身行（「苦行」とも表現される）がともなっていたらしく、安岳県石羊鎮油坪村の毘盧洞摩崖造像の柳本尊十煉窟（九六〇〜九九〇頃の成立）には、煉指、立雪、煉踝、剋目、割耳、煉心、煉頂、捨臂、煉陰、煉膝の十の姿が造像されている。また、幽居窟には「三身」がまつられるが、こ



毘盧洞摩崖造像・柳本尊十煉窟

れはどれも柳本尊の三身らしく、それぞれ法身、色身、化身を表現しているという。

また、大足県宝頂鎮の宝頂山摩崖造像の柳本尊十苦行図にも、同じく十の苦行（捨身行）の場面が造型されている。この図の下方には十大明王像が描かれ、また上方には、円相のなかに九体の仏が造型されている。また、最上部には「唐瑜伽部主総持王」の文言が墨書されている。

私は柳本尊の造像に接して、指臂を焚き剥いだという日本の奈良時代の僧、行基の活動をただちに想起した。だが、よく考えてみると両者の活動にはいくつかの差異があり、時代も異なる。今後は、柳本尊の活動をアジア東部における仏教の僧の活動の一つとして、他の国や地域と比較しながらさらに詳細に検討していく必要があると考える。

大仏の造像

四川省には著名な樂山大仏、榮泉



黃橋大仏

大仏、潼南大仏寺大仏、二仏寺大仏などをはじめとして、「大仏」と現地で呼ばれる大型の仏像がたくさんある。今回の調査では北山後山大仏、黄桷大仏、高升大仏、仁寿大仏（牛角寨大仏）などに接することができた。

黄桷大仏は安岳県鴛大鎮にある。これは像高一六メートルという弥勒坐像で、唐代のものである。ただし、頭部は炸毀せられ、現在のものは後補であり、胸部より下部に当初のものが残る。また、大仏の左右に展開する仏像群は二十世紀後期の廃仏によって破壊されたらしく、現在のもものはごく近年の造像であった。しかし、現地には、破壊された古仏の頭部、小龕、供養人像など的一部分が残り、計測および写真撮影を行うことができた。

高升大仏は高升郷雲龍山にある。この大仏は独尊像ではなく、華嚴三聖の坐像で、三尊仏になっている。中尊は毘盧遮那仏、向かって右が文殊菩薩、左が普賢菩薩で、北宋時代のものである。こうした華嚴三聖像は、他にも、先に述べたように妙高山の華嚴三聖・十六羅漢や華嚴洞石窟の華嚴洞にまつられるし、宝頂山摩崖造像にもまつられている。なお、高升大仏の三聖龕の龕内右側に小龕があり、そこに柳本尊の三煉

図がある。と現地解説板等に記されているが、残念ながら現地を確認することができなかった。

仁寿大仏（牛角寨大仏）は、後述する仁寿县高家鎮鷹頭村の牛角寨摩崖造像の中心にある弥勒像で、唐代のものである。この像は頭、肩、合掌する手の部分のみがあるばかりで、体部は未造であり、山そのものが体部の代わりになっている。この大仏は西面している。

仁寿县の牛角寨摩崖造像

私たちは、安岳県から成都への帰路に仁寿县に立ち寄り、牛角寨摩崖造像を調査した。ここにある道仏龕や三宝龕を是非実見、調査したいと考えたのである。私たちは山を反対側から登ってしまったため、大仏直下の駐車場に至ることができず、山中の別の駐車場から約二キロメートルの細い山道を徒歩にて進み、ようやく仁寿大仏（牛角寨大仏）に辿り着くことができた。大仏の周囲には、千仏龕、維摩結経变相龕、観無量寿経变相龕、千手観音龕など仏教の摩崖造像が多数あり、唐、宋代のものであるという。私たちはそれらを限られた時間の中で観察、調査した。けれど、宗教融合の摩崖造像がなかなか見つからない。地元の方々



牛角寨摩崖造像・壇神岩

に尋ね、バイクに乗せていただくなどして大仏の南東方向にてようやく目的の摩崖造像に出あうことができた。

この岩は「壇神岩」と呼ばれており、正面から見ると、中央中段に羅漢龕があり、三羅漢と背後の二尊で計五体がある。その向かって右隣には経年変化により劣化した小龕がある。また、羅漢龕の下の中央下段には小さな仏龕が二つある。向かって左部には下段に真人群像龕がある。ここには蓮台の上に立つ道教の真人の男像と女像とが計三五体もあり、実に迫力に満ちた龕になっている。左部上段には三つの龕がある。そのうちの左から三番目（最も中央



牛角寨摩崖造像・真人群像龕

寄り)の龕は、正壁に仏五尊、左右壁面に二体ずつの計九体をまつる仏龕である。さらに、右部下段には道仏合龕があり、正壁に三体の蓮台に立つ像があり、左壁右壁にそれぞれ一体ずつがあり、計五体の像がある。中央の像と、向かって右の像は道教の神像で、向かって左の像は仏教の如来像である。ただ、如来像は盗難により頭部を失っている。また、右部上段にも小龕がある。

さらに、正面から向かって左側に回り込んだ側部下段には三宝龕(三清龕)があり、典型的な道儒仏三教合龕であるという⁽¹⁾。正面の三体の坐像の下部には供養人らしき像が多数レリーフされている。ここは向

かって左壁に題記があり、そこに「大唐天寶八歳太歳己丑□未朔十/五日戊申三洞道士楊行□三洞女道士/楊正真三洞女道士楊□□(中略)共造三寶像一/龕(後略)」の文言が判読できる。唐の天寶八年は七四九年で、これは道士と女道士が共に造立した「三寶」の龕であるという。また、その右隣にも上下二段にわたって龕がある。さらにまわりこんだ背部にも、複数の龕があり、道仏合龕と思われるものがある。また如来・脇侍像の仏龕や、二観音龕など仏教の龕がいくつもある。私たちは、ここでも仏教の龕とともに、道教の真人群像龕や宗教融合の合龕に接することができた。

唐代後期〜五代〜宋代における四川省の仏教史の展開や宗教融合の諸相は大変興味深く、日本の平安鎌倉時代の仏教史の展開や宗教融合の姿を考究する上でも、両者の比較研究が重要になると考えている。



牛角寨摩崖造像・道仏合龕



牛角寨摩崖造像・三宝龕

〔注〕

- (1) 胡文和『四川佛教、道教石刻芸術』四川人民出版社、一九九四年。郭相穎主編『大足石刻銘文録』重慶出版社、一九九九年。胡文和『安岳大足佛雕』文物出版社、二〇〇八年。大足石刻研究院編『大足石刻』重慶出版社、二〇一二年。李先達・郭璇・陳蔚・冷婕編著『大足石刻与古建筑群』重慶大學出版社、二〇一五年など。
- (2) 劉長久『安岳石刻芸術』四川人民出版社、一九九七年。成都文物考古研究所他『四川安岳縣圓覺洞摩崖石刻造像調查報告』（四川大學博物館他編『南方民族考古』九、科學出版社、二〇一三年）。四川省文物局他編『安岳石窟圓覺洞保護研究』科學出版社、二〇一五年。西南大學石窟藝術研究所『四川安岳縣茗山寺石窟調查簡報』『四川文物』一八一、二〇一五年。星亮『四川安岳臥仙院石窟刻經研究』巴蜀書社、二〇一六年など。
- (3) 菊竹淳一「大足宝頂山石刻の説話的要素」『仏教芸術』一五九、一九八五年。下泉全暁「中国大足石刻の十忿怒明王像について」『密教学研究』二二、一九九〇年。鎌田茂雄「宋代仏教文化の一断面」（大隅和雄編『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館、一九九三年）。同「華嚴三聖像の形成」『印度学仏教学研究』四四—二、一九九六年。同「四尊十二菩薩の形成」同四七—一、一九九八年。同「大足宝頂山石刻の思想史的考察」『国際仏教学大学院大学研究紀要』二、一九九九年。同「唐宋末初の華嚴と密教」同四、二〇〇一年。北進一「四川安岳縣臥仙院石窟の大涅槃像について」『和光大學表現学部紀要』二、二〇〇一年。荒見泰史「大足宝頂山石窟「地獄變龕」成立の背景について」『絵解き研究』一六、二〇〇二年。小林正美「金録齋法に基づく道教造像の形成と展開」『東洋の思想と宗教』二二、二〇〇五年。奈良美術研究所編『仏教美術から見た四川地域』雄山閣、二〇〇七年。肥田路美「四川仏教石刻の性格」（氣賀澤保則編『中国中世仏教石刻の研究』勉誠出版、二〇一三年）。
- (4) 国家文物局主編『中国文物地図集 重慶（下）』文物出版社、二〇〇九年。
- (5) 同前
- (6) 注1胡文和『安岳大足佛雕』。
- (7) 同前。
- (8) 同前。
- (9) 華嚴三聖像については、注3鎌田茂雄「華嚴三聖像の形成」。
- (10) なお、華嚴三聖像は鎌田注9論文が述べるように、浙江省杭州市の飛來峰摩崖造像にもある。青林洞入口上部のものも二〇一七年十一月二十四日の調査で見ることができた。
- (11) 国家文物局主編『中国文物地図集 四川分冊（中）』文物出版社、二〇〇九年。

（付記）

掲載した写真のうち、妙高山摩崖造像、石門山摩崖造像の三皇洞および孔雀明王像は高橋早紀子氏撮影。他は吉田一彦撮影である。